

I. はじめに

『武道の何を学ぶか』ということは、指導者の立場から表現すれば『体育授業の中で、武道の何を指導するか』ことであろう。

これまでの剣道授業の問題点としては、木原らの先行研究によれば、まず、「いつも同じことの繰り返し」「興味や意欲がわからない」等の初心者指導の難しさがある。さらに、限られた授業時間の中で生徒たちに、剣道のよさと運動欲求をともに充足させることは至難のことであり、竹刀で打たれると痛い、剣道具の扱いが難しいとの指摘がなされている。

平成24年度よりの徳島県中学校武道実践として剣道51校・柔道23校・相撲18校・合気道1校・空手1校がなされる予定である。しかし、必修化前に徳島県中学校剣道部における指導者を対象とした意識調査(本村,2003)では、正課体育授業で剣道を実施している中学校がない。(選択教科で1校のみ実施)これまでの傾向として、剣道指導経験のある体育教師においても授業では剣道を扱わない流れにあった。このことは剣道が中学校体育授業としていかに扱いが難しいかを適格に表しているといえよう。

II. 学校教育での剣道

中村氏雄氏は『今、なぜ、武道なのか—文化と伝統を問う』(日本武道館2007)の中で、剣道の伝統と文化を学校教育に組み込む学習目標の提言として、以下の三点を挙げている。

(1) 基本動作

「自然体」「すり足」「構え」等の身体技法を通して中心感覚を理解させる。

(2) 対人的技能

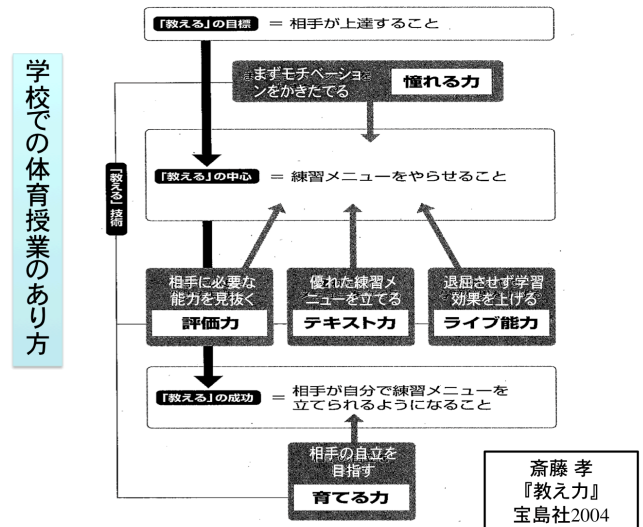
相手の攻撃をかわし、技を決めることを通しての「呼吸」「間」を理解させる。

(3) 運動の質的価値

心と体を一体としてとらえ、技の完結性を目指す運動領域とする。

私自身も中村氏の提言に賛同するものであるが、剣道経験の少ない体育教師が十数時間の中で、中村氏が提言する内容をどこまで理解して、授業が展開できるか、大きな不安を感じるところである。

下図は斎藤孝氏が『教え力』(宝島2004)の中で「教える側に必要な五つの力」として提示しているものであり、筆者は剣道の授業を含め、学校での体育授業のあり方として、教師が再認識すべきで内容であると考えている。



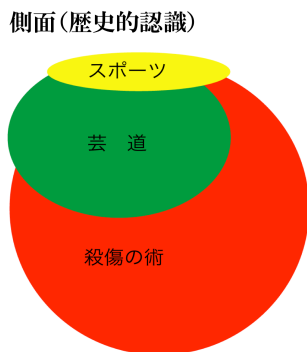
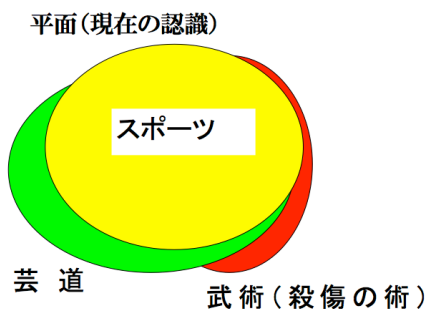
筆者は、剣道授業を含め、学校教育の大目標は「人間力の育成(人間形成)」であると思う。その上で、体育授業(剣道)の中で「相手(生徒)が上達すること」を実現させるために、体育教師に以下の五つ事柄が必要である。

- 1) 憧れる力・・教師自身はそのものに対して憧れ、真剣に取り組んでいること。
- 2) 評価力・・相手に必要な能力を見抜くこと。
- 3) テキスト力・・優れた練習メニューを立てること。
- 4) ライブ能力・・退屈させず、学習効果を上げること。
- 5) 育てる力・・生徒が自分で練習メニューを立てられるようになること。

前述した中村氏が提言した三つの学習目標と斎藤氏の「教える側に必要な五つの力」を考え合わせると、剣道授業を担当する教師の教材研究の方向性が見えてくる感がある。

III. 剣道の特性

次の図は、筆者が剣道のイメージを平面(現在の認識)と側面(歴史的認識)として表したものである。



剣道の構成イメージ

現在の一般的な剣道の認識としては、「剣道がスポーツの1種目である」として、スポーツ少年団や国民体育大会の一競技種目として認知されている。しかし、現在においても、スポーツの範疇に収まらない「芸道」「武術」的要素も合わせ持っており、日本の伝統的な運動文化としての認識も存在している。しかし、歴史的には「武術(殺傷の術)」「芸道」としての認識の方がスポーツよりも長いといえよう。

学校体育における剣道授業においても、「武術(殺傷の術)」「芸道」的要素を授業の中でどう組み込めるかが、武道の特性として大切になってくるように思う。

IV. 筆者らの剣道授業実践

1) 対人技能とテキスト力を意識した授業

竹刀の代用として、百元ショップダイソー玩具の「戦士の剣」を使用した。そのまま使用すると気剣と思われる柄の部分を取り外し、次に柄の芯になる部分を40cmの竹(不用竹刀の一部)2本を合わせ作成した。さらに、竹を剣に差し込み、固定させ、梱包用のエアークラップで全体を二重に巻き、テープで固定した。完成品は長さ85cm、重さ125gとなった。

さらに、タオルを帽子状に折りたたみ、頭部と耳部の保護をし、目の保護のために

水泳用のゴーグルを使用した。これらの試作用具を用いて、N大学附属小学校および公立S中学校で4時間限定の剣道授業を行った。



さらに、これらの改良版として、スポーツチャンバラの面と剣を使用した授業実践をN大学附属中学校および公立S中学校で4時間限定の授業を行った。



2) 芸道的要素(剣道らしさ)を意識した授業

N大学における剣道授業受講生全員に袴を装着させた。



V. まとめ

筆者らの剣道授業実践を通して、以下の2点を確認することができた。

- 1) 剣道授業における使用用具を工夫することで早期の互角稽古への移行と打突の攻防を楽しめることができる。
- 2) 袴の着用が剣道らしさの創出につながる。